

Title	<研究論文>社会的スキル行使におけるメタ認知の役割： 「メタ・ソーシャルスキル」の探索的研究
Author(s)	石井, 佑可子
Citation	教育方法の探究 (2005), 8: 38-46
Issue Date	2005-03-31
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/190308">http://dx.doi.org/10.14989/190308</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 社会的スキル行使におけるメタ認知の役割

### ——「メタ・ソーシャルスキル」の探索的研究——

石 井 佑可子

#### 1. 問題と目的

##### (1) 社会的スキル

社会性の一指標として、社会的スキル（ソーシャルスキル）を有していることが重要視されており、犯罪学・臨床心理学・社会心理学・発達心理学・教育心理学など様々な領域で研究が進められている。

社会的スキルの定義は未だに統一されていない。社会的スキルと一口に言っても、研究者によって意味するところ・重視する部分がまちまちである（Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R., 1988；堀毛, 1990；相川, 2000の分類など参照）。現在定義の統一を目指す動きは特に見られず、研究者の意図に応じて菊地（1988）に見られるような「円滑な人間関係を進めるような具体的行動」などの既存の定義に従って簡潔に定めるにとどめられているようである。

##### (2) 社会的スキル研究の流れ・広がり

社会的スキルの定義が多様性をもつ背景には、社会的スキル研究がいくつかの流れを汲んでいることにある。まず臨床の分野である主張性訓練法（Wolpe, 1958）がその中心の一つとなっている。主張性訓練法でのモデルに「スキル欠落モデル」があり、対人的不適応状態に陥っている人に欠けているものとして対人場面での社会的スキルが挙げられている。もう一つの中心的研究は社会心理学領域で、Argyle（Argyle, 1967；Argyle & Kendon, 1967）の「社会的相互作用中に生起する一連の個人的行動は便宜的に運動スキルと見なせる」という示唆からなる。大まかにはこの2つの流れに分かれるが、社会的スキルの概念はその他の分

野でも利用されており、発達・教育心理学的研究においては学業成績と社会的スキルとの関係（Hall & Gaeddert, 1960など）や、精神遅滞の子どもにおける社会的スキルの欠如（Doll, 1953）などが早くから指摘されていた。これらの複数の流れのためか社会的スキルを取り上げる領域は非常に広く多様である。

近年でも学習障害やアスペルガー症候群の人々における社会的スキルの欠如（Whitehouse, Chamberlain & O'brien, 2001など）や、産業の分野で社会的スキルの高さが仕事面での誠実さ・職務遂行能力・より高い給料と関係すること（Witt & Ferris, 2003）が報告されている他、電子メールや電子掲示板などのコンピューターを介したコミュニケーションにおける社会的スキルの影響が指摘される（五十嵐, 2002）など、未だにその概念は広範囲の適応を説明するものとして役立っている。

特に最近の流れとして庄司（1994）は「反社会性から非社会性へ」関心が移行していると指摘する。それと共に対人関係に対する社会的スキルも注目されているといえる。

また社会的スキルの大きな特徴として学習性を持つことが挙げられるため、訓練によって必要なスキルを身につけることを目的としたソーシャルスキルトレーニング（Social skills training, 以下 SST）のプログラムが考案されている（Argyle, 1967；Trower, Bryant, Argyle, 1978など）。社会的スキル研究と同様、SST自体もその対象を広げており、初期の治療を目的としたものだけでなく、小学校において学級単位で行われるもの（藤枝・相川, 2001；Zsolnai & Jozsa, 2003）や、大学生

を対象に実験的に行われるもの（相川、1999）・大学教育の一環として自ら希望する学生を対象に実習形式で行われるトレーニングも増えてきた（大坊・栗林・中野、2000；後藤・宮城・大坊、2004など）。

### （3）社会的スキルの測定

社会的スキルの測定としてわが国では自己報告型の尺度が現在広く使用されている。広く使用されているものの一つである和田（1991）の「ソーシャルスキル尺度」はBurmester, Furman, Wittenberg & Reis（1988）の interpersonal competence questionnaire を基に作成されたもので、対人課題領域における言語的な対人有能性を「親密関係維持」「関係開始」「自己主張」による3因子25項目で測る形式となっている。また、堀毛（1991）はSpitzberg & Cupach（1988）らが分類した社会的スキルの段階のうち行動面に焦点をあて、ディコーディング（解読）・エンコーディング（記号化）スキルに大別して尺度項目に取り上げた（ENDE 1）。現在は、会話をうまくすすめるなどの「記号化」、言葉がなくても相手のいいたいことが何となく分かるなどの「解読」、相手の言うことが気に入らなくてもそれを態度に出さないなどの「統制」の3つの基本スキル15項目からなる ENDE 2 に改良されている（堀毛、1994）。

これらの尺度における項目から、社会的スキルとして測定されているのは①対象を設定せず、②「望ましい」とされるスキル行動を③実際に行使するか否かについてであることが窺える。

### （4）社会的スキルの問題点・課題

多くの領域でその有用性が指摘されている SST 及び社会的スキルではあるが、問題点として、長期的な効果や実際の生活への一般化が見込まれにくいということが指摘されている。

まずソーシャルスキルトレーニング（SST）の効果については、研究者達は短期間の行動変容には効果を認めているものの、一般的な見解として

効果の維持や日常生活への一般化に関しては疑問が残るとしている（Marzillier, 1978；Trower, 1995；相川、1999など）。また社会的スキル自体についてもその傾向はうかがえる。関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響について大学生を対象として調べた実験研究では、関係継続の予期あり条件において社会的スキルの効果が見られなかったとしている（木村・磯・大坊、2004）。つまり現在のところ、社会的スキル及びその獲得トレーニングはその場限りの一時的な効果を持つものにとどまっているといえる。トレーニング効果の維持・一般化を高めることが SST の課題として残されており、社会的スキルについても、長期的な対人関係に効果を持つスキルまで視野を広げることが必要とされている。

### （5）社会心理学分野における社会的スキル研究

前述した通り、近年一般的な対人関係に関わる社会的スキルが関心を集めている。社会心理学分野では「円滑な人間関係を進める」といった対人関係での特に高次の段階の社会的スキルに注目してきた。これまでに社会的スキルの不足・欠如と、精神的健康（Argyle、1967など）、抑うつ（Segrin & Abramson, 1994など）、孤独感（相川、2000；和田、1991など）など、様々な不適応状態との関係が報告されている。

測定尺度の箇所でも述べたとおり、このような研究では社会的スキルとしてスキルを現実にとだけ使っているかの単純な「頻度」やスキル行動の表出を中心的に取り上げ、その度合いと社会的適応との関係が検討されてきた。逆に、非主張的なことや社会的スキルを使う頻度が少ないことは不適応だとされている（Trower, Bryant & Argyle, 1978など）。また、測定の項目に社会的スキルとして取り上げられているのはどのような人間関係にも共通して有用なスキルや友人関係などある特定の関係に限定して通用するスキルで、いずれも暗黙裡に「望ましい」とされるスキルである。

しかし、実際の生活に即して考えてみれば「本

来望ましいとされているスキル」を通状況的に高頻度を使用するということがどのくらい重要なのだろうか。日常生活での高次な社会性が要求される対人場面を想定すると、多様なスキルをポテンシャルとして有しており、状況の特質を的確に認知した上で、保持するスキルの中から特定のスキルを適宜行使したり、時には敢えて用いなかったりできることの方がより重要な要素かつ自然な振る舞いとも考えられる。

これまで社会的スキル行使時における状況要因の重要性はしばしば指摘されてきたが（Hargie, 1986; Van Hasselt, V., Hersen, M., Whitehill, M. & Bellack, A., 1979など）、実際に測定し検討を試みた研究はあまりない。現在挙げられている社会的スキルが長期的な効果を持たないことも併せて考えると、社会的スキル行使と社会的適応との関係を検討する際に、状況のメタ認知を含む処理過程まで考慮する必要があるのではないか。

そこで、社会的適応に対する従来の社会的スキルの役割を補助・強化する概念として、ネガティブなものも含めた社会的スキルや対人関係状況のメタ認知・それに基づくスキルの適切な選択的行使・非行使に拘る能力である「メタ・ソーシャルスキル」の提案を試みる。本研究では、その概念化妥当性の検討にあたって社会的スキル行使の際に自らのコミュニケーションスタイル・状況のメタ認知がもつ役割について検討する。まず以下に、メタ認知を含むスキル行使に関わる処理過程について検討し仮説の設定を試みる。

#### (6) 社会的スキル・対人関係状況のメタ認知

Dodge (1986) は、子どもの攻撃行動における研究の中で認知・行動・適応との相互関係を一連の流れのなかで扱うことの重要性を主張している。彼は、社会的状況における行動反応は複数の認知処理によって決定するので、社会的情報処理にかかわるスキルや順次的なパターンを包括的に測定することが、その社会的行動や適応を強力に説明するとした。

社会的スキルを適切に選択し行使するに際して

も、同時に状況のメタ認知を的確に働かせていることが不可欠であろう。社会的スキルや対人関係状況のメタ認知は「メタ・ソーシャルスキル」の重要な要因として、挙げられる。

「メタ・ソーシャルスキル」を発揮するためには、スキルのメタ認知から実際のスキル行使までいくつかの要素が含まれている。その概念化にあたっては各段階の設定・整理をする必要がある。

そこで「メタ・ソーシャルスキル」の各段階について、Dodge の主張に従って彼自身が提案したモデルにならい、定めることとした。Dodge は認知から行動が生起するまでの流れを一連の情報処理過程として捉え、複数のステップを設定した社会的情報処理モデル（Dodge, 1986; Crick & Dodge, 1994（改定版））を提案している。改定版社会的情報処理モデルでは6つのステップが設定されており、「1. 社会的手がかりの符号化（内的・外的）」～「6. 行動実行」にまで至る。また、このモデルにはそれらに加えて過去の経験や記憶からなる「データベース」が設定されており、それが各ステップと相互に影響しあっているとされている。社会的情報処理モデルは本来子どもの攻撃行動や不適応行動の生起を説明するために提案されたものであるが、児童期以外の青年期に対してもこのモデルを使った研究がなされていること（Shahinfar, Kupersmidt & Matza, 2001; 久木山、2002など）、攻撃行動や不適応行動は対人関係の中で起こる行動であるということ、社会的情報処理モデルにおいても状況に応じた行動に注目しているということなどから、「メタ・ソーシャルスキル」にも十分応用可能であると考えられる。そこで対象とする社会的行動を社会的スキルに特化してモデルにあてはめ、「メタ・ソーシャルスキル」について整頓した。（同様のモデルに Argyle や Dodge のモデルを踏まえ、社会的スキルを過程と捉えた相川・佐藤・佐藤・高山(1993)；相川(2000)の「生成過程モデル」がある。）各段階やその具体的な内容については以下のようにまとめた。<sup>1</sup>

① 符号化・解釈：「状況・関係性の読み取り」

対人関係場面において、状況・相手との関係性（関係の持続性・力関係・立場）を把握すること。

- ② 目標の明確化：「対人関係場面における望む結果の認知」  
おかれている対人関係場面で自分自身がどのような結果や相手との関係性を得たいのかの明確な認知。
- ③ 反応のアクセスと構築：「その状況下で可能なスキルの探索」  
おかれた場面で行使できそうな社会的スキル候補の列挙。
- ④ 反応の決定：「適切なスキルの選択」  
望む結果と状況に応じた社会的スキルの選択。
- ⑤ 行動実行：「スキルの行使・非行使」  
選択したスキルの行使、しなかったスキルの抑制。
- ⑥ 仲間からの評価・反応：「効果の学習」  
相手の反応・状況の結果から行ったスキルの効果を学習。

データベース（記憶・獲得されたルール・社会的スキーマ・社会的知識）

「スキルレパートリーの把握（多様性・正確性）」

- a. 多様性；行使することの出来るスキルを多様に保持していること。
- b. 正確性；自分が行うことの出来る社会的スキルを正確に把握していること。
- e. バランス；スキルとして行われるコミュニケーションスタイルに、ポジティブコミュニケーション・ネガティブコミュニケーションがバランスよく含まれていること。

「各スキルの効果の知識」

ネガティブ・ポジティブに関わらず、自分が行うスキルがどういう結果（効果）を及ぼすのかについて自覚していること。

本研究では、設定した各段階の過程を測定する尺度を作成する。その上で、社会的スキル行使と社会的適応との関係にスキルや状況のメタ認知がどのように影響するのかについて検討する。具体的

には、従来使用されてきた2種類の社会的スキル尺度と新たに作成するメタ認知の尺度を用いて社会的適応に影響する際の影響を探る。

先行研究（和田、1991；堀毛、1991）から今回使用する従来の社会的スキル尺度が社会的適応と関係することはある程度予測される。Dodgeに従うならば、社会的スキルの行使は的確なメタ認知に基づいてなされる場合により社会的適応と関係が見られると予測できる。

従って仮説としては、「社会的スキル行使頻度が高く、かつメタ認知をよく行ったときに社会的適応は最も高くなるだろう」という交互作用モデルが挙げられる。

## 2. 方法

調査参加者；18歳から35歳の大学生・専門学生ら567人（男性201人・女性366人、平均年齢20.37歳）  
質問紙の構成<sup>2</sup>；（A、B共通）

### ①「メタ・ソーシャルスキル」に関する尺度<sup>3</sup>

「コミュニケーションスタイル・状況のメタ認知」…「メタ・ソーシャルスキル」の行使段階を除く各段階・データベースに関する12項目。それぞれの項目について「普段の生活で他の人たちと関わるときに自分がどの程度あてはまるか」について全くあてはまらない～とてもあてはまるまでの4段階で評定させた。

（Aタイプのみ）

### ②「社会的スキルA」…堀毛（1994）のENDE 2を使用した。各項目について4段階評定で回答を求めた。

### ③社会的適応の指標

「日常生活における情動経験」

…Izard, Libero, Putnam, Haynes（1993）のDifferential Emotions Scale-IVを翻訳したもの。DES-IVは12種類の情動についてそれぞれ3項目ずつで問う形式になっている。本研究ではこれらの12情動に加えてprideに関する3項目を付け加えた。計39項目について「日常生活で以下に挙げる気持ちをどの程度感じるか」を、1. 全くない～4. よくあるまでの4段階評定

で回答を求めた。

〔自尊感情〕…Rosenbergの自尊感情尺度の翻訳版を使用した。各項目について4段階評定で回答を求めた。

#### 〔Bタイプのみ〕

④〔社会的スキルB〕…和田(1991)のソーシャルスキル尺度から、2因子に亘って因子負荷量が.35以上であった一項目を除いた24項目を使用した。回答は4段階評定で問うた。

#### ⑤社会的適応の指標

〔身体・精神的健康〕…諸井(1996)の身体・精神的健康尺度から、因子負荷量の低い項目を除いた20項目を使用した。原尺度に従い、「ここ6ヶ月くらいのあなたについてお聞きします。以下で述べられている状態をここ6ヶ月の間にどのくらい感じますか。」と教示し、各項目について1. けっして感じない～4. たびたび感じるの4段階評定で回答を求めた。(得点が低いほど健康)

〔対人信頼感〕…堀井・槌谷(1995)を使用した。「あなた自身の人間観についてお聞きします。以下の文章にご自分の人間観はどのくらいあてはまると思いますか。あてはまる番号を○で囲んで下さい。(「人」とは、人間一般を指します)」と教示し、17項目について1. そう思わない～4. そう思うの4段階評定で回答を求めた。

### 3. 結果

〔メタ認知尺度〕因子分析を行い(重み付けの無い最小二乗法、プロマックス回転)、 $\alpha$ 係数・スクリープロットテストの結果1因子解を採用した。 $\alpha$ 係数から、2項目を除外した10項目の合計得点を「社会的スキル・状況のメタ認知」得点とした( $\alpha = .72$ 、Table 1)。

〔社会的適応における社会的スキル行使とメタ認知の関わり〕社会的適応の得点として、自尊感情、身体精神的健康、対人依拠感得点を算出した。DESに関しては因子分析を行い、得られたポジティブ情動因子(誇り・興味・喜び・驚き)・ネガティ

Table 1 コミュニケーションスタイル・状況のメタ認知尺度項目(10項目、 $\alpha = .72$ )

1. 意志疎通が思い通りにいかなかったときに、コミュニケーションの仕方を変えてみる。
2. 自分がとる行動によって、人とのやりとりの結果や相手への影響がどのようになるのかについてだいたい自覚している
3. 状況や自分が望む結果などを考えて、その場で一番良いと思える態度・行動をできるだけとろうとする
4. その場の状況がどういうものかについてすぐ理解できる
5. 自分がとる可能性のある態度や行動はだいたい自覚している
6. その場で、どういうやり取りをしたいのか冷静に考える
7. 相手との立場の違いやこれからの関係について意識する
8. 実際にするかしないかは別にして、その場で自分がとることのできそうな行動についていくつか思い浮かべることが多い
9. 時と場合によって、やろうと思ったらできるコミュニケーションのとり方でもあえてしないことがある
10. コミュニケーションをとるときに、過去の実験を思い起こして参考にすることがある

ブ情動因子(自己嫌悪・悲しみ・罪悪感・恐れ・怒り・照れ・恥・嫌悪)に従ってそれぞれポジティブ情動得点・ネガティブ情動得点を算出した。

社会的スキル行使得点・メタ認知得点をそれぞれ平均点で高群・低群に分け、社会的適応についてメタ認知得点高低×社会的スキル高低で、2×2の2要因分散分析を行った。

Aタイプ; 自尊感情( $F(1,257) = 30.25$ )とポジティブ情動( $F(1,257) = 29.36$ )・ネガティブ情動( $F(1,257) = 255.14$ )の全てにおいて、社会的スキル行使の主効果がみられた( $p < .01$ )。また、自尊感情( $F(1,257) = 5.39, p < .05$ )とポジティブ情動( $F(1,257) = 7.23, p < .01$ )においてメタ認知の主効果がみられた。さらにネガティブ情動において、社会的スキル行使×メタ認知の交互作用が見られた( $F(1,257) = 8.52, p$

<.01)。社会的スキル行使の高低群ごとに分析を  
すると、社会的スキル行使低群でメタ認知の主効  
果が見られ ( $F(1,149) = 21.46, p < .01$ )、スキ  
ル行使頻度が低い人においてメタ認知が高くな  
るとネガティブ情動を高めることが示された。性別  
ごとに分析した結果、男性では自尊感情において  
メタ認知の主効果 ( $F(1,90) = 8.89, p < .01$ )・  
女性で自尊感情における社会的スキル行使の主効  
果 ( $F(1,164) = 86.48, p < .01$ ) のみが見られた。  
(Table 2)

Bタイプ；身体・精神的健康 ( $F(1,244) = 38.98$ )、対人信頼 ( $F(1,244) = 14.57$ ) 両方におい  
て、社会的スキル行使の主効果が見られた ( $p < .01$ )。メタ認知の主効果・交互作用は共に認めら  
れなかった。性別ごとに分析した結果、男性で身  
体・精神的健康における社会的スキル行使の主効  
果 ( $F(1,82) = 9.51, p < .01$ ) と社会的スキル×  
メタ認知の交互作用 ( $F(1,82) = 4.39, p < .05$ )  
が有意に見られた。メタ認知の高低群ごとに分析  
すると、メタ認知高群における社会的スキル行使  
の主効果が見られ ( $F(1,53) = 24.34, p < .01$ )、  
メタ認知が高く社会的スキルを行使する頻度が高  
いほど身体・精神的健康感が高いことが示された。  
女性では、身体的・精神的健康 ( $F(1,158) = 21.77$ ) と対人信頼 ( $F(1,158) = 12.74$ ) において  
社会的スキル行使の主効果のみが見られた ( $p < .01$ )。

Table 2 Aタイプ；メタ認知・社会的スキル高低群に  
おける自尊感情・ポジティブ情動・ネガティ  
ブ情動の平均点（全体・男性・女性）

※（ ）内はSD

全体

		[メタ認知]		[社会的スキル行使]	
		低群		高群	
自尊感情	低群	23.11(3.57)	23.36(5.38)		
	高群	23.62(4.16)	27.41(4.39)		
ポジティブ情動	低群	7.08(1.12)	8.04(1.61)		
	高群	7.57(1.22)	8.47(1.61)		
ネガティブ情動	低群	10.62(1.24)	8.03(1.80)		
	高群	11.50(1.03)	7.76(2.02)		

		男性	
		[メタ認知]	[社会的スキル行使]
		低群	高群
自尊感情	低群	22.00(—) *	23.85(4.12)
	高群	— *	26.59(4.30)
ポジティブ情動	低群	6.33(—) *	8.10(1.54)
	高群	— *	8.70(1.41)
ネガティブ情動	低群	8.25(—) *	7.48(1.19)
	高群	— *	7.12(1.51)

		女性	
		[メタ認知]	[社会的スキル行使]
		低群	高群
自尊感情	低群	23.13(3.58)	33.67(3.72)
	高群	23.62(4.16)	31.42(2.07)
ポジティブ情動	低群	7.09(1.12)	7.72(2.10)
	高群	7.57(1.22)	7.39(1.44)
ネガティブ情動	低群	10.65(1.22)	11.04(1.64)
	高群	11.49(1.03)	10.87(1.06)

\* 男性における—は、その群内に該当する者がいなかったため。

Table 3 Bタイプ；メタ認知・社会的スキル高低群に  
おける身体・精神的健康・対人信頼感の平均  
点（全体・男性・女性） ※（ ）内はSD

全体

		[メタ認知]		[社会的スキル行使]	
		低群		高群	
身体・精神的健康	低群	44.88(9.69)	39.56(9.47)		
	高群	45.63(9.00)	39.54(9.48)		
対人信頼感	低群	40.77(5.99)	44.00(6.23)		
	高群	39.44(5.67)	42.38(6.46)		

		男性	
		[メタ認知]	[社会的スキル行使]
		低群	高群
身体・精神的健康	低群	43.17(9.40)	41.13(8.37)
	高群	45.96(8.46)	35.22(7.59)
対人信頼感	低群	40.35(5.50)	42.50(4.57)
	高群	39.43(5.04)	40.72(7.05)

		女性	
		[メタ認知]	[社会的スキル行使]
		低群	高群
身体・精神的健康	低群	45.55(9.80)	39.25(9.74)
	高群	45.25(9.79)	36.73(8.18)
対人信頼感	低群	40.93(6.22)	44.30(6.51)
	高群	39.45(6.46)	43.59(5.77)

.01) (Table 3)。

#### 4. 考察

本研究の目的は、社会的スキル行使が社会的適応と関わる際に社会的スキル・対人関係状況のメタ認知が果たす役割を検討することであった。

社会的適応におけるメタ認知と社会的スキル行使との関係については、交互作用効果が一部（全体のネガティブ情動・男性における身体・精神的健康）で見られた。男性における身体・精神的健康感、メタ認知・社会的スキル行使ともに高く行っているときに最も高くなるという結果が示され、仮説が支持された。しかしネガティブ情動への効果に関しては、スキル行使頻度が低い人においてメタ認知が高くなるとネガティブ情動を高めるといったねじれた結果となり、仮説に反してはいないものの、十分支持されたとは言い難い。

今回想定した仮説を証明するような結果があまり見られなかった理由としては、社会的適応の指標の問題が挙げられる。Dodgeが彼のモデルについて指摘している通り、一連の情報処理は一方通行なのではなく、その都度行きつ戻りつするものである。また、データベースは対人関係経験によって時間をかけて得られていくものといえる。つまり「メタ・ソーシャルスキル」の処理過程は、より長期的な視点からみた適応に対して最も効果を発揮すると考えられる。今後社会的適応の指標を捉えなおし、そこに対人関係の長期的な効果についても併せて測定し関係を探ることが要される。

性差については、男女で違う結果が得られたものの、それぞれに一貫した傾向の違いは見られなかった。しかし対人関係場面において性別によっ

て行使される社会的スキルやその効果といったものが変わるということは容易に想像ができる。今回明確な相違が見られなかった理由として、調査参加者の男女比率のアンバランスさや、各群に分類した際に該当者がいないグループが存在したことなどが考えられる。男性と女性では、そもそも社会的スキルの行使やメタ認知においてその得点が有意に違うのかもしれない、今後はその点を考慮してそれぞれの標準点による群分けをした上での分析を行わなければいけない。

メタ認知尺度については、信頼性の $\alpha$ 値はやや低かったものの、いくつかの社会的適応に対して主効果が見られた。社会的スキル行使を通さなくてもメタ認知自体が社会的適応に直接影響を及ぼしていることが示唆されている。今後信頼性を上げるために尺度を改良するとともに、メタ認知が社会的適応へ及ぼす直接・間接効果についても検討をする必要がある。また、交互作用モデルだけではなく、社会的スキルの行使がメタ認知を媒介して社会的適応を説明するといったような媒介モデルについても可能性が考えられる。

今回、「メタ・ソーシャルスキル」の重要な要素であるメタ認知について、社会的スキル行使と共に社会的適応に及ぼす影響が一部ではあるが示唆された。本研究で得られた結果の検討を通して「メタ・ソーシャルスキル」に関しての概念化をより詳細かつ磐石にしていくことが今後の課題であるといえる。

#### 参考文献

- 相川 充 (1999) 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究 14 95-105
- 相川 充 (2000) 人づきあいの技術 社会的スキルの心理学 セレクション社会心理学-20 サイエンス社
- 相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1993) 社会的スキルという概念についてー社会的スキルの生起過程モデルの提唱ー 宮崎大学教育学部紀要 社会科学 74 1-16



- Argyle, M. (1967) *The psychology of interpersonal behaviour*. Penguin books. (アージル, M. (著) 辻 正三・中村陽吉 (訳) 1972 対人行動の心理 誠信書房)
- Argyle, M. & Kendon, A. (1967) The Experimental Analysis of Social Performance in Berkowitz, L. (eds) *advances in Experimental Social Psychology*, Vol3, 55-98 Academic Press, New York.
- Burmester, D., Furman, W., Wittenberg, M. T. & Reis, H. T. (1988) Five domains of interpersonal competence in peer relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 991-1008
- Crick, N. R. & Dodge, K. A. (1994) A Review and Reformulation of Social Information-Processing Mechanisms in Children's Social Adjustment. *Psychological Bulletin*, **115** 74-101
- Dodge, K. A. (1986) "A social Information processing Model of Social Competence in Children In M. Perlmutter (Ed.), *Minnesota symposium in child psychology* (pp. 77-125). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Doll, E. A. (1953) *Measurement of social competence: A Manual for Vineland Social Maturity Scale*. American Guidance Service.
- 大坊郁夫・栗林克匡・中野 星 (2000) 社会的スキル実習の試み 北海道心理学研究 **23** 22
- 藤枝静暁・相川 充 (2001) 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究 **49** 371-381
- 後藤 学・宮城速水・大坊郁夫 (2004) 社会的スキル・トレーニングの効果性に関する検討ー得点変化のパターンにみる参加者クラスティングの試みー 電子情報通信学会技術研究報告 **104** 7-12
- Hall, W. E. & Gaedert, W. (1960) Social skills and their relationship to scholastic achievement. *Journal of Genetic Psychology*, **96** 269-273
- Hargie, O. (1986) Communication as skilled behavior. In Hargie, O. (ed) *A Handbook of Communication skills*. Croom Helm.
- 堀毛一也 (1990) 社会的スキルの習得 斎藤耕二 菊池章夫 (編) 社会化の心理学 ハンドブック 人間形成と社会と文化 川島書店 pp79-100
- 堀毛一也 (1991) 社会的スキルとしての思いやり 菊池章夫 (編) 現代のエスプリ 291 思いやりの心理 至文堂 pp150-160
- 堀毛一也 (1994) 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究 **34** 116-128
- 堀井俊章 樋谷笑子 (1995) 最早期記憶と対人信頼感との関係について 性格心理学研究 **3** 27-36
- 五十嵐 祐 (2002) CMC の社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性 社会心理学研究 **17** 97-108
- Izard, C. E., Libero, Putnam, & Haynes (1993) Stability of Experiences and Their Relations to Traits of Personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64** 847-860
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する 向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- 木村昌紀 磯 友輝子 大坊郁夫 (2004) 関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響 電子情報通信学会技術研究報告 **104** 1-6
- 久木山健一 (2002) 社会的情報処理尺度の妥当性検討に関する試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 **49** 207-215
- 諸井克英 (1996) 高層集合住宅居住者における社会的支援と身体・精神的健康 社会心理学研究 **11** 180-194
- Segrin, C. & Abramson, L. Y. (1994) Negative Reactions to Depressive Behaviors: A communication Theories Analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, **103** 655-668
- Shahinfar, A., Kupersmidt, J. B., Matza, L. S. (2001) The Relation Between Exposure to Violence and Social Information Processing Among Incarcerated Adolescents. *Journal of Abnormal Psychology*, **110** 136-141

庄司一子 (1994) 子どもの社会的スキル 菊地章夫  
堀毛一也 (編) 社会的スキルの心理学 100の  
リストとその理論 川島書店 pp202-218

Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R. (1988) *Hand-  
book of interpersonal competence research*.  
Springer.

Trower, P. (1995) Adult social skills: State of  
the art and future directions. In O'Donohue,  
W. & Krasner, L (Ed) *Handbook of psycho-  
logical skills training: Clinical techniques  
and applications* (pp54-80)

Trower, P., Bryant, B. & Argyle, M. (1978) The  
analysis of social behaviour. In Trower, P.,  
Bryant, B., Argyle, M. & Marzillier, M. (ed)  
*Social skills and mental health*. Methuen pp7-  
34

Van Hasselt, V., Hersen, M., Whitehill, M. &  
Bellack, A. (1979) Social skill assessment  
and training for children: an evaluative re-  
view. *Behavior Research and Therapy*, 17  
413-437

和田 実 (1991) 対人有能性に関する研究 ―ノン  
バーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度  
の作成― 実験社会心理学研究 31 49-59

Whitehouse, R., Chamberlain, P. & O'brien,  
A (2001) Increasing social interactions for  
people with more severe learning disabilities  
who have difficulty developing personal rela-  
tionships. *Journal of Learning Disabilities*,

5 209-220

Witt, L. A. & Ferris, G. R (2003) Social skill as  
Moderator of the Conscientiousness-Perfor-  
mance Relationship: Convergent Results A-  
cross Four Studies. *Journal of Applied Psy-  
chology*, 88 809-820

Wolpe, J. (1958) *Psychotherapy by reciprocal  
inhibition* Stanford Univ. Press.

Zsolnai, A. & Jozsa, K (2003) Possibilities of  
criterion referenced social skills develop-  
ment. *Journal of early childhood research*, 1  
181-196

#### 注

- 1 相川の生成過程モデルは一連の流れ全体を社会的  
スキルとしているが、本研究での社会的スキルは表  
出されうる具体的行動に限定した。
- 2 本調査では項目数が多く調査参加者の負担になる  
と考えられたことから、社会的適応・従来の社会的  
スキルにあたる尺度を半分ずつ分け2種類 (A・B)  
の質問紙を作成した。それぞれをランダムに配布し、  
いずれかに回答を求めた。(Aタイプ回答者; 男性  
101人、女性183人・Bタイプ回答者; 男性100人、女  
性183人)
- 3 他に、「ポジティブ・ネガティブスキルの行使頻度」  
を親密性に分けて回答を求めたが、今回の分析には  
使用しなかった。

(修士課程)